北九州市を掘る（108）

埋蔵文化財速報展

豊前小倉の城下町 －魚町遺跡第３地点の調査から－

1. はじめに

本遺跡は小倉北区魚町４丁目に所在する江戸時代の遺跡です。調査区は紫川の支流である神獄川のすぐ東側にあり、付近の標高は約２ｍです。発掘調査は旦過地区土地区画整理事業に伴って行われ、調査期間は令和５年２月、９月、12月～令和６年２月です。調査は東西２区に分けて行い、１区の面積は290㎡、２区は1,210㎡、合計1,500㎡です。

ここは当時、小倉城の城下町に位置していました。小倉城は紫川を挟んで大きく東西の曲輪に分かれており、西曲輪には天守を中心とした城の中枢施設と武家屋敷、東曲輪には寺や町屋などが配置されています。幕末頃に描かれた『小倉藩士屋敷絵図』によると、調査区付近は東曲輪にある「郡屋鋪」「町屋鋪」に相当する場所と考えられます。

2. 神獄川の護岸石垣（１区）

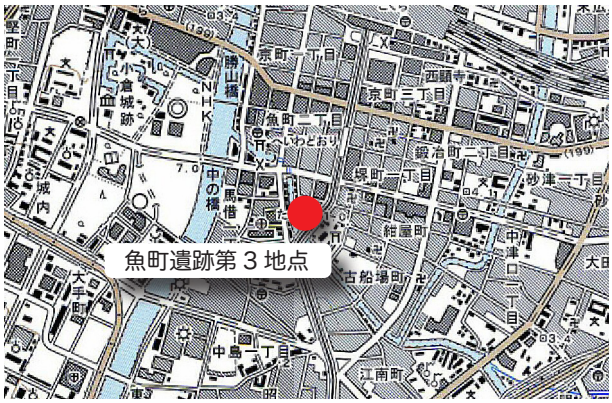
西側に位置する１区では、自然石を積み上げた野面積みの石垣がみつかりました。これは長さ約24ｍにわたって確認され、西に面して南北方向に延びています。石垣の高さは北側で144㎝、南側で190㎝を測り、南から北に向かって低くなっていることがわかります。この石垣は調査区のすぐ西側を流れる神獄川の護岸だと考えられます。神獄川は小倉城の築城以降、城郭内に取り込まれ、堀としての役割を担っていました。

3. 石組溝（２区）

２区の調査では、調査区の中央付近に南北方向に延びる石組溝（排水路）がみつかりました。この溝は『小倉藩士屋敷絵図』の中にも見ることができ、これを境に西側は「郡屋鋪」、東側は「町屋鋪」であったことがわかります。この溝は東西に向かい合う石垣を壁としており、石垣の高さは約140㎝です。溝の幅は南側で90㎝ほどですが、北側では、東側の石垣が東に折れ、約2.5ｍ幅に広がります。なお、東西どちらの石垣も背後に、もう１面の石垣が確認されており、当初は約４ｍ幅で造られていたことがわかりました。

4. 紺屋町一丁目の町屋鋪（２区）

石組溝の東側にある町屋鋪では石垣、石列、井戸、埋甕など多くの遺構が確認されました。ここでは石列の配置から、北、中央、南の３つの区画に分けることができます。北部ではＬ字状に残る石列の北側に、土坑が10基確認されました。こ



遺跡の位置（1/25,000）

１区神獄川護岸の石垣（南西から）

２区石組溝（左手が町屋鋪、右手が郡屋鋪、北東から）

２区石組溝と町屋鋪全景（南西から）

２区町屋鋪土坑群で確認された土師質土器の甕（南東から）

２区郡屋鋪で確認されたＬ字状に並んだ石列（南から）

の土坑群は石組溝と平行して２列に並んでおり、中に土師質（はじしつ）の甕（かめ）が残るものがあることから、本来は全てに甕が据えられていたと考えられます。このような状況は普通の民家とは考えにくく、何らかの商売を行う商家であったと考えられます。

商家（町屋）は通常、道に面した表部分を店とし、奥に居住空間と裏庭、蔵などを設けています。これを今回の調査成果に照らし合わせてみると、町屋鋪の北部は店、中央部が居住空間、南部は裏庭や蔵が配置されてたことが想定されます。

中央部では、自然石を積み上げた井戸とその周囲に敷石が配置され、敷石の縁（ふち）に沿って石列が並んでいます。町屋の居住空間の中には「通（とお）り庭」と呼ばれるスペースがあります。これは表と裏を繋ぐ通路であるとともに、カマドや水甕などの炊事設備が設けられた台所としても利用された場所です。カマドの横には井戸が設けられていることがあり、今回みつかった井戸はこの「通り庭」に位置していると考えられます。また、裏庭と考えられる南部では、2.9 m× 5.9 mのコ字状に並ぶ石列が確認されました。これは当時の寸法に換算すると 1.5 間× 3 間に相当し、蔵の基礎だと考えられます。また、この蔵の東側には、いわゆる「便所甕」と呼ばれる埋甕が確認されています。

なお、『小倉藩士屋敷絵図』に拠れば、この場所は「紺屋町（こん(こう)やまち）一丁目」にあります。紺屋とは藍染めを専業とする染物屋であることから、付近にはこれに関わる職人がいたことが想定されます。紺屋には甕場と呼ばれる作業場があり、そこには染料となる液体を入れた藍甕が並べ置かれています。これらのことから、土坑群がみつかった町屋鋪北部は甕場であった可能性が高く、つまり、この町屋鋪は紺屋であったと考えられるのです。

5. 郡屋鋪（2 区）

石組溝の西側にある郡屋鋪では石垣や石列、礎石（そせき）、埋甕などが確認されました。石垣は南に面して東西方向に延びており、長さ 17.5 mにわたって検出されました。高さ 175 ㎝を測り、西側で神嶽川の護岸石垣と接続すると考えられます。この石垣は石組溝より東側にある町屋鋪側には続いていませんでしたが、町屋鋪の南東端部でも、石垣が確認されており、本来は南に面する石垣が石組溝を挟んで東西両方に延びていたと考えられます。

また、北側ではＬ字状に並んだ石列を確認しました。南北方向に延びる石列は調査区外に続いており、東西方向の石列も途中で途切れているため、本来の長さは不明ですが、東西 5.2 m×南北 6.6 mを測ります。また、石列で囲われた範囲内には、建物の柱を支えるための礎石もみつかっており、郡屋鋪の建物の一部だと考えられます。

なお、郡屋鋪とは領内６郡大庄屋の会合場所であり、『豊前叢書（ぶぜんそうしょ）』には企救郡の他５郡が在中する長屋造りの建物があったとされます。

埋　蔵　文　化　財　通　信

埋蔵文化財調査室では令和５年度に『能行遺跡第５地点』『貫・裏ノ谷遺跡第２地点』など、８冊の報告書と研究紀要 38 号、年報 40 を刊行しました。これまでに刊行された報告書等は各区の図書館にてご覧になることができます。

また、イベント情報や最新の発掘情報などはホームページにて公開しています。なお、イベント情報は市政だよりでもお知らせしております。是非、ご覧下さい。

編集・発行
公益財団法人北九州市芸術文化振興財団
埋蔵文化財調査室
〒803-0816　北九州市小倉北区金田一丁目 1-3
TEL(093)582-0941　FAX(093)582-8970
北九州市都市ブランド創造局文化企画課
〒803-8501　北九州市小倉北区城内 1-1
TEL(093)582-2391　FAX(093)581-5755
発行日　令和６年８月 20 日
ホームページ
きたきゅうまいぶん　検索